

第 59 回クラシックを楽しむ会

2018 年 10 月 21 日（日）18:00～（1 時間 25 分、休憩除く）

タイトル：歌劇「オルフェオとエウリディーテ」（グルック）1762 年ウィーン版

会場等：パリ・シャンゼリゼ劇場公演
（2018 年 5 月 28、31 日）

楽団等：イ・バロッキスティ、
フランス放送合唱団

指揮：ディエゴ・ファソリス

演出：ロバート・カーセン

出演：フィリップ・ジャルスキー（オルフェオ）
パトリシア・プティボン（エウリディーチェ）
エメケ・バラート（アモーレ）
その他



第 3 幕、振り向かないオルフェオに怒るエウリディーチェ

ものがたり

有名なギリシャ神話の物語。冥界から妻エウリディーチェを連れ戻そうとするオルフェオ。地上に出るまでは妻の顔を見てはならないという忠告に背き、不安にさいなまれて振り返ってしまい、妻はまた冥界に戻ってゆくという悲しい物語。

なお、このオペラは、オーストリアの女帝マリア・テレジアの夫フランツの命名式祝賀用オペラとして作曲されたため、結末は神話と異なりハッピーエンド。

歌劇「オルフェオとエウリディーチェ」の版について

ウィーン版は 1762 年にウィーンの宮廷劇場（後のブルク劇場）で初演された作品でイタリア語版である。パリ版は 12 年後の 1774 年、パリ・オペラ座上演のために改作したものでフランス語版である。オルフェオ役のカストラートをオート・コントロール（高い声のテノール）に改め、フルートの名曲「精霊の踊り」を追加し、オーケストレーションも大規模なオペラに改変した。

シャンゼリゼ劇場

1913 年に完成したアール・デコ様式の最初期の建築。名門フランス国立管弦楽団とラムルー管弦楽団の本拠地。ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のフランスでの活動拠点。ストラヴィンスキーがバレエ「春の祭典」をこの劇場で初演したとき、前衛的過ぎて大スキャンダルを巻き起こしたことも音楽史上有名。



シャンゼリゼ劇場（○印）、下セーヌ川、上シャンゼリゼ通り

第 60 回クラシックを楽しむ会（予告）

タイトル：歌劇「ローエングリン」（ワーグナー）

11 月 18 日（日）17 時 30 分開場、18 時上映開始

バイロイト音楽祭 2018 年 7 月の公演。「婚礼の合唱」（結婚行進曲）でご存知、ロマン派ドイツオペラの頂点を極めるオペラを、ピョートル・ベチャワ、アニヤ・ハルテロスなど現代最高の歌手陣で！指揮は巨匠クリスティアン・ティーレマン!!。

12 月以降、2018 年 6 月のボリショイ・バレエ「コッペリア」、ザルツブルグ音楽祭 2012 「ボエーム」、ザルツブルク音楽祭 2018 年 8 月の歌劇「スペードの女王」などを予定。

あらすじ

【時と場所など】

ギリシャ神話の時代、地上の森と冥界（黄泉の国）

【登場人物】

オルフェオ： 豎琴弾き
エウリディーチェ： オルフェオの妻
アモーレ（キューピッド）： 愛の神
その他、羊飼いや、ニンフ（精霊）、冥界の妖精たち

【第1幕】エウリディーチェの墓がある森の中

豎琴弾きオルフェオの愛する妻エウリディーチェが毒蛇に足を咬まれて急死。オルフェオは月桂樹のある森の中の墓前に泣き崩れ、嘆きの歌「**愛する人をこれほど呼んでも**」を歌う。羊飼いやニンフたちの踊りもオルフェオの嘆きを鎮めることができない。

ゼウス神たち神々がオルフェオを憐れんで愛の神アモーレを遣わし、アモーレはオルフェオに「冥界へ行ってエウリディーチェを地上に連れて帰ってよい。ただし、地上に連れ帰る途中、妻を決して見てはならない。見たら永遠に妻を失う」と伝える。

【第2幕】冥界の入り口と天上の楽園

オルフェオが現世から冥界へと進むと、地獄の亡霊や復讐の女神たちが不気味に踊り狂っている。亡霊たちはオルフェオの行く道を阻み脅かす。オルフェオが豎琴を手に取り、「**もしわづかでも愛に悩んだ覚えがあるのなら**」と同情を訴えると、亡霊たちはオルフェオの見事な演奏に慰められ、願いを聞き入れる。

オルフェオは静かで美しい楽園に到達。ニンフたちは幸せそうに”**精霊の踊り**”を踊っている。オルフェオは「**なんと澄みきった空**」と歌い、エウリディーチェの居所を尋ねる。ニンフたちはオルフェオの英雄行為を讃え、エウリディーチェを連れてくる。オルフェオは彼女を見ないようにして手を取って地上へと向かう。

【第3幕】森の中の洞穴とアモーレの神殿

オルフェオは妻の姿を見ずに妻の手をとって何も尋ねるなど地上へと向かう。エウリディーチェは再会の喜びもつかの間、自分のことをひと目も見えてくれない夫の態度を疑う。オルフェオは懸命に妻をなだめるが妻は「**なんと辛いひと時**」と歌い夫に顧みられない悲しみを爆発させる。オルフェオは必死の想いで試練に耐えていたが、愛する妻のさらなる懇願に妻の姿を見てしまう。その瞬間エウリディーチェは気を失う。オルフェオは深く嘆いて名曲「**エウリディーチェを失って**」を歌い自ら命を絶とうとする。そのとき再び愛の神アモーレが現れ、「よく耐えました。それで十分です」と言い、エウリディーチェに命を吹き込む。オルフェオとエウリディーチェは抱き合って喜び、愛の神を讃える。

アモーレの神殿。オルフェオとエウリディーチェのまわりに羊飼いや森の精たちが集まってアモーレへの感謝を歌い、明るく優雅に喜びの踊りをささげる。

補足. オルフェウス伝説

オルフェオとエウリディーチェの物語は、古代ローマの詩人ウェルギリウスの「農耕詩」第4歌（蜜蜂の章）で語られ、同じく古代ローマの詩人オウィディウスが書いた叙事詩「転身（変身）物語」の第十巻、「オルペウスの冥界下り」で紹介されている。

オルフェオ（オルペウス。オルフェウス、オルフェとも）は吟遊詩人で豎琴の名手。凶暴な野獣や森の木々さえも感動させた。母はムーサイ（ミューズ、文芸・音楽・天文など知的な活動を司る9人の女神）の一人で長女のカリオペーとされる。

エウリディーチェ（エウリュディケー）はニュンペー（ニンフ、精霊、下級女神）の一人で森の木に宿り樹木を守る。

アモーレ（エロース。クピードー、キューピッドとも）は愛（恋）の神。愛と美の女神アプロディーテー（ウェヌス、ヴィーナス）の子とされる。

出演者

フィリップ・ジャルスキー（オルフェオ役）は1978年フランス生まれのカウンターテナー歌手。ヴァイオリンのディプロマ取得後、声楽に転向。華やかさのある美声と超絶的な技巧を持ち、バロックの声楽曲の解釈で高い評価を受け、フランスのシュバリエ勲章など受賞多数。

パトリア・プティボン（エウリディーチェ役）は1970年フランス生まれのコラトゥーラ・ソプラノ歌手。バロックから近代までのフランス、ドイツの歌劇や喜歌劇等多数出演。2015年ジャズバイオリニストと再婚。

エメケ・バラート（アモーレ役）は1985年ハンガリー生まれの新進ソプラノ歌手。当初はピアノとハーブ。18歳でフランツ・リスト・アカデミーの声楽へ進む。すでに名門レーベル ERATO と独占録音契約を結び2019年初めにはソロアルバムのリリースを予定。

ディエゴ・ファソリス（指揮）1958年スイス生まれの指揮者・オルガン奏者。1998年からイタリアのバロックアンサンブル、イ・バロックスティの指揮者。

ロバート・カーゼン（演出）1954年カナダ生まれのオペラ、ミュージカル、舞台演出家。メト、スカラ座、バステューユ、コヴェントガーデンなど主要歌劇場と、グラインドボーン、ザルツブルク、ブレゲンツなどの音楽祭で活躍中。カナダ勲章の役員に指名されている。



ジャルスキー

プティボン

バラート



ファソリス

カーゼン

参考資料

グルック

グルック(1714 - 87)はドイツ生まれの作曲家。27歳でオペラ作曲家になり、それまでカストラートの技巧誇示だったオペラを、このオペラで改革し音楽史上に残る作品となった。パリに移って、ピッチーニと有名な**オペラ論争**を起こし、改革オペラの巨匠として名声を高めたが、時代は貴族社会の**オペラ・セリア**から市民社会の**オペラ・ブッフ**に移ってしまった。

余談

モーツァルトとグルックの意外な関係

グルックのこのオペラはウィーンの宮廷劇場で1762年10月5日に初演。当時6歳のモーツァルトはその年9月から父レオポルト・モーツァルトに連れられてウィーンに滞在。10月13日シェーンブルン宮殿で女帝マリア・テレジアの御前で演奏。滞在中の幼いモーツァルトはこの初演を観たかもしれない。

1783年皇帝ヨーゼフ2世（マリア・テレジアの長男）臨席のモーツァルトの演奏会に、モーツァルトに好意的な王室宮廷音楽家の称号をもつ69歳のグルックも座敷席にいた。モーツァルトはグルックに敬意を表して彼の曲を主題にした変奏曲(K.455)を即興演奏して大成功。その後1787年に年俸2000フローリンのグルックが亡くなり、後任の榮譽に輝くモーツァルトが得た年俸はたったの800フローリン!!